氏名（本籍）	諏訪智美（茨城県）
学位の種類	博士（　芸術学　）
学位記番号	博甲第 7002 号
学位授与年月	平成２６年　３月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	日本の絵画における遊魚表現

主　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	太田　圭
副　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	守屋正彦
副　査	筑波大学教授		藤田志朗
副　査	東京国立博物館出版企画室長	博士（芸術学）	勝木言一郎

論文の内容の要旨

（目的）

本研究の目的は、日本の絵画における遊魚図の成立と展開について、中国美術、日本美術の古典にその淵源を求め、表現の史的展開を考証し、また、水面下の魚の実態をどのように表現にするかという制作的な観点から、筆者独自の遊魚表現を合わせて試行して、遊魚表現について体系的に考察することを目的としている。

（対象と方法）

本研究は、日本絵画における遊泳する姿での魚の表現に注目し、これを主題とした遊魚図の画題解釈を中心に古典絵画から近現代にいたる編年的な表現の解釈を行っている。遊魚表現は、中国において藻魚図という一画題によって認識されてきたのに対し、日本ではあくまで花鳥画の一部として見なされてきた傾向がある。このことについて筆者は、遊魚図の展開と、水中観察の手段の変化とが関係している可能性にも着目したうえで、遊魚図を独立した一画題として興味深いものと捉え直している。日本において遊魚図の成立、ならびに展開を論じた先行研究にはこれを主題とした体系的な論考はなく、そのため、遊泳する魚の表現については、このテーマをくくる用語はなく、便宜的に「遊魚表現」の造語によって論考を展開することとした。著者は藻魚図を受容してからの展開に着目し、写生画としてその模倣を離れていった経緯のほか、水族館が出現したことによる視覚体験の変化にも言及している。

第１章では、まず中国絵画における藻魚図の解釈について、各論的であった先学の見解を統括し

つつ、とくに視点の設定に特徴を見出したほか、描かれた魚種を踏まえて新たに考証を加えている。そのうえで、こうした藻魚図が日本に舶来した当初の様相について、室町画魚をはじめとした具体的な作例をあげて考証に臨んでいる。

第２章では、まず南蘋画の受容、江戸博物誌の隆盛、蘭書の影響など、近世における写生画の流行を支えた気風を踏まえたうえで、日本における遊魚表現が、藻魚図の模倣を離れて展開した例に言及している。円山応挙の鯉の表現においては、水面を斜め上から眺める視点の設定に注目しており、藻魚図との比較を踏まえて、遊魚図における新たな手法として位置づけている。また伊藤若冲による《蓮池遊魚図》は、法要の場に置かれることで陸上の生き物と同等の存在感が求められ、色彩的な表現が積極的に用いられたとして採りあげる。このほか宋紫山の《鯉図》もまた、魚体の質感を執拗に再現するような描写に臨み、写生画、とくに博物画との交流を示唆するものとして例に挙げた。藻魚図が水墨の表現と不可分であったことを踏まえ、こうした作例が藻魚図の系譜を離れたものであることを主張している。さらに、藻魚図には見られない海産魚というモチーフが獲得されたことにも触れており、これを海の幸としての寓意に支えられた新たな画題、海錯図として位置づけている。

第３章では、近代における遊魚表現が、水族館の実現を受けて新たな展開を見せたと指摘した。都路華香の《水底游魚図》が水族館での写生をもとに描かれていることに着目し、当時の水族館の展示内容と照らして詳細に考証している。《水底游魚図》において視点が水没し、モチーフも海産物として観念的に描かれるのではなく、個性ある生き物として捉えられつつあったことを、海錯図の近代的な展開として位置づけた。また、『大日本魚類画集』を遊魚図の観点から考察の対象として挙げており、遊魚図において生態が主題とされたことについて、当時の魚類学者の言質や生態写真の存在などにも触れつつ、その重要性を主張している。

第４章では、画家の取材方法や着想の幅が、近代科学の影響下にあって大きく変化したことを受け、近代絵画における遊魚表現が、伝統的な画題に依らず展開した例に広く言及している。遊魚がおかれる空間についても、余白や藍隈によって水であることが示唆されてきた近世までの手法と異なり、画面全体にわたって絵具が塗り込められるようになったことに着目した。さらに本章では筆者自身が新たな遊魚表現を試行しており、実際の作品制作において、岩絵具の性質を遊魚空間の表現と結びつける考え方を示している。また、魚体に生々しい質感を与える手法として、『衆鱗図』の工芸的な技法を応用しており、箔を魚体の下地としてではなく描画材として用いることに臨んだ。このほか陸上の風景を遊魚空間として表現する試みなどを通して、遊魚表現のもつ可能性を示唆している。

（結果）

筆者は本研究の成果として、わが国における遊魚図の成立と展開について、これまで等閑視されてきた主題解釈について、さまざまな美術史にかかる文献を渉猟し解釈を行った。

第１章では、日本における遊魚図の成立という点について、室町時代における水墨画の受容と消化のなかで起こったものと位置づけたほか、しかし藻魚図本来の精神寓意の理解には至らず、表象的な受容であったと明らかにした。

第２章では、藻魚図の系譜から離れた遊魚表現を、写生画の展開の中に見出した。とくに水面の

設定の出現、博物画と結びついたことによる魚体の表現手法の変化、海錯図という新たな画題の出現があったことを明確にし、近世における日本の遊魚図に、藻魚図を離れての多様な展開があったことを示した。

第３章では、近代における水中観察の手法の変化、とくに水族館の出現が、遊魚図に及ぼした変化を明らかにした。海中景として視点の水没があったこと、観念的なモチーフであった海産魚が、個々の生物として捉え直されたことなどを、海錯図の近代的な展開として示した。このほか『大日本魚類画集』が、遊魚図において生態が主題とされた作例として、特筆的なものであることを明らかにした。

第４章では、近現代の遊魚表現が次第に伝統的な画題から離れていった様相を、具体的な作例を示して明確に論じた。とくに戦後の日本画材の開発を受け、遊魚空間が画面全体への絵具の塗布によっても構築されるようになったことで、遊魚表現は心象表現とも結びついたとした。こうした遊魚表現の変遷に鑑み、水面下の魚の実態、その生命の実在を表現する意義を念頭におきながら、実際の制作において筆者独自の遊魚表現を試行したといえる。

（**考察**）　遊魚図は、陸上に生活する我々とは別世界、すなわち水面下にある生命を描く性質上、観察手段の文明的な発展とも密接に結びついて展開しており、その時代ごとの自然観、思想を読み解くうえで重要な画題であると考えられる。遊魚図を独立した一画題として捉え、その表現の変遷を概観することは、ひいては自然や生命に対して日本がどのように向き合ってきたかを知る大きな手掛かりともなるだろう。また、こうした遊魚図の画題がもつ重要性に着目し、さらに現代において、制作者として新たな遊魚表現を試行したこと、さらに作品そのものの発表だけでなく、その思考や位置づけを学問上にも論じようとした本論の試みは、美術史を現在進行形のものとして捉える新たな研究手法として、今後の可能性を広げるものと考えられる。

審査の結果の要旨

（**批評**）

筆者が制作で追い求めるところの「遊魚表現」について、画題の変遷を考証したうえで課題を明らかにしていくという方法をとり、中国の藻魚図を受容してからの展開に関して丁寧な考察を進めている。本研究は、日本における遊魚表現について、制作主題の観点、表現者の立場から古典文献、古典作品について網羅的な解釈し、また、制作者の立場から遊魚表現を具体的な制作として試行を加え、主題解釈に新たな可能性を指摘している。遊魚を描く画家は少ないとは言えないが、主観的な表現に終始することなく、主題を分析して体系化した優れた制作研究として高く評価したい。

平成 26 年 1 月 24 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。